大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

# 慶応3年7月22日付：中岡慎太郎について



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2010-03-11<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 池田, 敬正<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.24729/00003782 |

慶応３年７月22日付

# 中岡慎太郎書状について

On the letter of S.Nakaoka
dated keio 3. 7. 22

池　田　敬　正

京都にある頼山陽所縁の養正社に所蔵されているこの手紙は、７月22日の日付、「本山様」の宛名、「清之助」の署名をもっており、すでに『保古飛呂比（佐佐木高行日記）』・瑞山会編『維新土佐勤王史』（大正１年刊）・尾崎卓爾著『中岡慎太郎』（大正15年刊）において紹介されている。『保古飛呂比（佐佐木高行日記）』によれば、「右書面ハ、今回国民新聞社ニテ開催セシ維新志士遺墨展覧会ニ出品シアリシモノヲ岩崎英重氏筆写セシモノ也、明治四十三年一月廿三日」と記されている。養正社に現在所蔵されているこの手紙と、明治43年に展示されたものを筆写した①『保古飛呂比（佐佐木高行日記）』にのせられた文面とを比べると、文意には異同はないのであるが、用語には二、三ちがいがあるので、まず養正社所蔵の手紙の全文を紹介しょう。

この手紙の日付は「七月廿二日」となっており、宛名は「本山様」、署名は「清之助」となっており、「七月廿二日」が内容からみて慶応三年（1867）と判断され、「本山様」は当時在国中であった大目付本山只一郎、「清之助」は中岡慎太郎の変名石川清之助であることもあきらかであって、すでにこの手紙を紹介している諸本の解釈も同様である。

明治維新が、いろいろな過程を前提にしながらも、その直接的な過程が武力討幕すなわち討幕の挙兵にはじまったことはいうまでもない。したがって明治

（前欠）又、乍恐竊ニ拝察候得者、君上御上京之思食も被為在哉ニ而、難有仕合ニ奉存候。然此度之事、御議論周旋而已ニ相止り候得者、再度御上京の可然候得共、是〻怱チ天下之大戦争ト相成候儀、明々タル事ニ御座候。然れハ、実ハ御上京不被為遊方宜敷様相考申候。斯ル大敵ヲ引受、奇変之働ヲ為シ候ニ、本陳（ママ）ヲ顧ミ候患御座候而ハ、少人数之我藩別而功ヲ為ス事少かるへしと奉存候。乍恐、猶明君英断、先ジテ敵ニ臨マント被為思召候事ナレハ、無之上事にて、臣子壱人か生還スル者有之間敷ニ付、何之異論可申上哉、只々敬服之次第也。此比長藩政府之議論を聞ニ、若京師事有ルト聞カハ、即日ニテモ出兵セント決セリ。依テ本末藩共、其内令を国中ニ布告セリ。諸隊之カ為メニ先鋒を争ひ、弩ヲ張ルノ勢也トノ事ニ御座候。

右者、私内存之処相認、御待史并乾様あたりへ差出候様、佐々木様〻御気付ニ付、如此御座候。誠恐頓首

七月廿二日　　清之助

本山様　玉几下

勿々相認、思出し次第ニ而、何時も失敬奉恐謝候。

維新の政治過程を分析するにあたって、武力討幕路線が具体的な政治方針として、何時どのような形で確定していったかをあきらかにすることは、きわめて大切である。この中岡慎太郎の手紙は、その書かれた時期・内容からいって、そうした問題を考えるために重要であると判断できるので、すでに紹介されてはいるが、改めて検討してみようというのが本稿の意図である。

中岡慎太郎は、天保９年（1838）土佐国安芸郡北川村大庄屋中岡小伝次の長男として生まれた。長ずるに及び武市瑞山の門に入り、尊王攘夷運動に参加して全国的に活躍した人物であることはよく知られている。その経歴からいって典型的な草莽尊攘派であったといえよう。後年になって同じ土佐出身の板垣退助が、もし中岡慎太郎が存命であれば、木戸孝允・大久保利通にならぶ明治政府の指導者になったであろうとのべているが、このことは、中岡慎太郎が、維新を実現させる討幕運動の展開のうえで指導的役割を果したことを評価していると判断できる。この中岡慎太郎の尊攘運動から討幕運動への路線の転回の内

容についてはすでにふれたので、ここではふれないが、中岡が土佐藩における武力討幕派のもっとも中心的な指導者[②]であったことはあきらかである。

さて、この手紙の大意は、「天下之大戦争」すなわち討幕の挙兵が必至の状況だから、「御議論周旋而已」すなわち武力を行使しない方針にとどまるならば、山内容堂の再度の上京は止めるべきだという見解、および長州藩においては「諸隊」が討幕挙兵の先鋒を競いあう状況になっているという報告の２点である。なおこの手紙は、文意からして当然「前欠」である。

要するにまず第一の問題は、討幕挙兵の方針が確立しつつある状況のなかでの上京は、討幕戦争に参加するつもりでなければ駄目だということであった。そしてその際の上京については、「再度御上京」とあるが、これは、四侯会議に上京した山内容堂が、目的を十分に果さないで帰国してからの再度の上京を意味する。四侯会議とは、条約勅許および長州処分の問題を通じて、幕府に委任してある政権を雄藩諸侯に委任させようとする西郷隆盛らの意図で開かれたものであった。この会議は、薩摩の島津久光・宇和島の伊達宗城・土佐の山内容堂・越前の松平春岳によって慶応３年（1867）５月に京都で開かれたが、将軍徳川慶喜の強い態度のため、西郷らの意図は実現しなかった。この間にあって土佐の容堂は、慶喜に妥協的であり、もっとも早く京都を離れた（５月21日帰国要請、27日京都出発、６月２日高知帰着）ので、西郷らに強い不信の念をいだかせたようである。

ところがこの四侯会議の解体は、薩摩藩に討幕挙兵の方針を固めさせることとなる。四侯会議の失敗が最終的にあきらかになった５月24日の翌日、在京薩摩藩重臣は藩邸に会合して挙兵方針を固める。『新納立夫日記』には、「五月二十五日、曇、出勤、九ツ時（午前12時―筆者註）御座の間ニ而、帯刀（小松―筆者註）殿より此節の事是より先之策相談、長と共、挙事の議粗定る」と記されていた。つづいて６月16日には、在京中の島津久光が、長州藩士山県有朋・品川弥二郎[③]を藩邸に招き、討幕挙兵の具体案を協議するため西郷隆盛を長州に派遣する旨を告げている。そのころ在京中の大久保利通が在藩の蓑田伝兵衛にあてた手紙には、「畢竟幕府之意底、四藩之御公論を採用、悔悟反正・勅命奉戴・正大公平之道を以、皇国之御為に尽力可致与之趣意毛頭不相顕、……

終に幕府、朝廷を掌握し、邪を以正を討、逆を似順を伐之場合に至り候は、案中之勢故、今一層非常之御尽力被為遊度、此上者兵力を備、声援を張、御決策之色を被顕、朝廷に御尽し無御座候而者、中々動き相付兼候」④と、幕府を批判し、出兵の必要をのべていた。

いずれにしろ薩摩藩の西郷らが四侯会議において期待していたのは、武力を行使しないで幕藩制を雄藩連合政権に改革する方向であったが、上にのべた四侯会議解体後の状況は、薩摩藩がいよいよ具体的に武力討幕の方針を固めたことを示している。このことは、薩摩藩だけの問題でなく、すでにその方針を固めていた長州藩および中岡慎太郎を中心とする土佐討幕派とも協力して、超藩的な武力討幕の方針が確立していくことを意味した。

在京中の山内容堂が病気を理由に帰国を朝廷に要請した5月21日、在京中の薩摩藩小松帯刀宅にて、同藩の小松・西郷隆盛・吉井幸輔・土佐藩の中岡慎太郎・乾（板垣）退助・谷干城・毛利恭助が会合し、討幕挙兵の密約がかわされた。中岡慎太郎日記（『行々筆記』）の5月21日の条には、「此夜、乾退（板垣退助一筆者註）等と小太夫に会、西郷・吉井集居」⑤と記されており、谷干城の『隈山詒謀録』では、土佐藩の出席者を石川（中岡慎太郎一筆者註）乾・毛利（恭助一筆者註）及余の四人なり」⑥としていた。そしてその席で、「万一政府（土佐藩一筆者註）遅疑するも、我等同志の徒は、愈よ結合を堅くし、已を得ざるに至らば、政府と離れて実行を期す」と板垣が発言したところ、「西郷・吉井等手を拍て快哉を呼べり」と記されている。ところがこの記事は、6月22日の薩土盟約のあとのことのようにして記されているが、『行々筆記』の記事があるところからみれば、谷干城の記憶ちがいと判断せざるを得ない。

しかも『行々筆記』の5月25日の条には、「福（福岡孝第一筆者註）・乾・毛・谷と喰々堂に集る」⑦とあり、その翌日、すなわち先述した在京薩藩重臣が討幕挙兵方針を固めた日の翌日である26日の条には、「今朝西郷に至り、乾・毛・谷決意のことを論じ帰る」⑧と記されていた。しかもその翌27日は、板垣退助が山内容堂に随って離京する日であった。ということは、薩摩藩と土佐藩の一部指導部とのあいだにむすばれた討幕の密約が、5月21日にむすばれたことに疑問をもつ説もあるが、⑨『行々筆記』にみられる動きからみて信用していい

のではないだろうか。中岡は４月４日、鹿児島から帰京して以来、多くの人々と面会しているが、『行々筆記』によれば５月21日の会合までに谷干城とは８回、西郷隆盛とは６回会っている。ということは、四侯会議をすすめていた西郷とたえず連絡をとりながら、中岡が、従来の勤王党に参加した軽格、郷士、豪農層とはちがう板垣、谷、毛利のような士格に属する層を討幕に組織していたことを示している。こうした中岡の動きが、21日の会合に結実したとみるべきであって、したがって25日の藩の重臣福岡孝第をもふくめた会合は、板垣らが藩内で主導権を確保していく方向あるいは藩内の軍制改革をどのようにすすめるべきかを議論したかも知れない。さらに26日の西郷訪問は、21日以後の土佐側の状況を報告するものであったろう。

要するに四侯会議以降の薩摩藩における武力討幕路線の確定のなかで、中岡慎太郎は在京土佐藩士中の討幕派勢力の結集の中心となり、一定の成果をあげつつあったのである。このような状況のなかで、６月13日に後藤象二郎が入京してきた。その長崎からの上京中の船中にて、坂本龍馬から『船中八策』を提示されて、大政奉還の構想をたてていたのである。

そのころの京都では、先述してきているような薩摩藩の動きがあった。６月２日に山内容堂に随行して帰国した大目付小笠原唯八は、「薩ハ兎角兵ヲ用ヰル事ヲ好ミ」と京都の状況を報告していた。⑩他方土佐藩は、山内容堂がもっとも早く四侯会議から脱落したため、「右御帰国ニ付テハ、京師ニテハ、御評判悪敷趣」であったようである。このような京都へ入った後藤は、一方では薩摩藩の武力討幕論にたいし妥協⑪の方策として、他方不評判となった土佐藩が京都での政局の主導権をとるために、大政奉還論を各方面に精力的に遊説したのであった。

そうした６月21日に、高知から由比猪内・佐佐木高行・毛利恭助が着京する。この３名は、６月13日に京都出張を命ぜられたのであるが、そのころの土佐藩内は、京都の状勢が伝えられるなかで、「今日薩ト異論ヲ生シテハ、勤王派ヨリハ攻撃ヲ受ケ、第一御国内破烈ノ形勢ナレバ、早々重役ノ者被差立、大義ヲ以、朝廷ニ尽シ候義、最モ急務也」という討幕路線に同調していく主張と、「今日討幕トハ何事ゾ、京師ニテ将軍ノ二条城ヨリ御参内ノ節、兵備、充実セ⑫

ル事其勢甚ダ盛也、二三藩ノ討幕スル者アラバ、是レ夏虫ノ火ニ入ル如シ」[13]との討幕に反対する主張とが対立していた。したがって藩の方針が一定しないままに上京することはできないとの上京を命ぜられた者たちの主張によって、藩内で２日がかりの大論争となった。しかし結論が得られなかったため、結局６月15日に、「上京ノ上大義ノアル処ト存候場合ハ、其処ヘ方向相定メ決行スベシ」[14]ということで話がまとまり上京することとなったのである。

このような状況で高知を出発した由比・佐々木・毛利の３名は、６月21日に入京した。ところが入京した彼らを待っていたのが、後藤の大政奉還論である。『保古飛呂比』の６月21日の条には、「午時（午前12時―筆者註）川原町御屋敷（河原町の藩邸―筆者註）ニ達ス、……即日真辺栄三郎旅宿ニ集会致、政権返上ノ建白ノ評決ス、同席ハ御仕置役後藤象二郎・由比猪内・福岡藤次（のちの孝弟―筆者註）・真辺栄三郎・自分等也」[15]とあり、上京してきた３名は着京した日に大政奉還論を藩の方針として決定する会合に参加したのである。

このようにあわただしく決定が行なわれたのも、恐らく翌22日に予定されていた薩土盟約の会合に間にあわせるためであろう。こうして６月22日、三本木の料亭にて、土佐側から後藤象二郎・福岡孝弟・寺村左膳・真辺栄三郎・坂本龍馬・中岡慎太郎、薩摩側から小松帯刀・西郷隆盛・大久保利通が出席して薩土盟約がむすばれた。この盟約は、５月21日の密約とちがって、大政奉還を実現させようとする公議政体論の立場にたち、しかもあくまでも武力行使を避ける立場にたっていたことはよく知られている通りである。

ということであれば、討幕論を主張しはじめている佐佐木が、上京したその日に、討幕論に反対していた真辺や寺村とともに、大政奉還論を藩の方針とする決定に参加したのは一体なぜか。あるいは土佐討幕派の実質上の中心である中岡が、このような薩土盟約をむすぶ会合に参加したのはなぜか。さらには長州藩と武力討幕の具体化計画を協議するようになった薩摩藩が、このような盟約を土佐藩とむすんだのは一体なぜかという問題がでてくる。先に、「薩ハ兎角兵ヲ用ヰル事ヲ好ミ」と小笠原唯八の報告を紹介したが、それにつづけて「老公（山内容堂―筆者註）ハイツ迄モ干戈ヲ動カサズ、十分尽力周旋スル思

召ニテ、其辺ハ喰違候」と小笠原ハ報告している。このときの薩土の立場の相違は、この小笠原の報告にみられるほどのちがいがあったとみなければならない。ただ「老公」の主張と後藤の主張との相違は、坂本龍馬に教えられた公議政体論にみられる具体的な国家構想の有無であった。ところがこの国家構想に関しては、討幕派の主張と後藤の主張とのあいだに、それほど大きな相違はなかったといえる。公議政体論が現実に考えている国家は雄藩連合政権であり、列侯会議体制であった。他方西郷が四侯会議を通じて実現を企図していた国家体制は、「共和政治」であり、雄藩連合政権であった。

いずれにしろ国家構想に関して基本的に対立がなく、というよりむしろ坂本・後藤に具体的に教えられたということが、佐佐木などが後藤の見解に同調する原因であり、薩土盟約を成立させた条件であった。ただちがうのは、そのような国家体制を実現させる戦術、すなわち武力行使をするかどうかだけであると考えられるようである。６月13日に京都出張を命ぜられたとき、佐佐木は「直ニ討幕ト申スハ無之候得共、只大義ノ有ル処ヲ以テ遂ニ討幕スベシ」[16]との方針決定を藩にもとめているが、この佐佐木の主張からみれば、新しい国家構想の実現が「大義」であって、「討幕」はあくまでも「大義」実現のための手段にしかすぎない。とするならば、佐佐木と後藤、薩摩と土佐のあいだにおいて戦術的な妥協は可能であったとみることができるのである。要するに討幕派のかなりの部分が、後藤の構想のなかに「大義」の実現の可能性を見出し、他方その武力行使否定の戦術は、多くの討幕に反対する層をも後藤の構想はひきつけた。

後藤は、大政奉還論を提起することによって、このような状勢をつくりあげさらに山内容堂の理解を得るため、７月４日京都を離れて帰国する。容堂がこの後藤の方針を全面的に受容れたことはいうまでもない。ところがこの時期に、板垣退助らが中心となり、軍制改革が進められて、旧来の弓槍を中心とした兵制を廃止し、すべて銃隊とする兵制が確立したのである。[17]

７月22日付の中岡慎太郎の手紙は、このような状況のなかで書かれたのである。薩土盟約がむすばれてから１カ月後であったが、この後藤の構想にもとづいた盟約に同調していた中岡が、討幕戦争の開始が必至であると報じており、

したがって幕府との決戦を覚悟せずに再度上京してくることに反対していた。このことは、討幕派の政治的立場が、後藤の構想にたいしてたとえ表面上同調したとしても、実質的には戦術的にも同調していなかったことを示している。四侯会議解体後に固まってくる武力討幕路線は、実質的には一貫して堅持されていたとみるべきであろう。

このような一貫した態度は、たとえば長州藩における「諸隊……先鋒を争ひ、弩ヲ張ルノ勢也」という状況を肯定する立場とむすびつくのではないだろうか。武力行使に否定的な態度をとるのは、幕府の軍事力および農民反乱への恐怖からであった。しかし長州藩の有志諸隊・農兵隊には、そのいずれもなかったといえよう。それはこうした諸隊が、内部に農商身分を多数ふくみこんでいるからであり、また第二次幕長戦争に勝利した経験をもっているからであった。このことは、戊辰戦争開始直前の木戸孝允の手紙によって、逆にあきらかにされる。

12月27日付の伊藤博文にあてた木戸の手紙は、挙兵に慎重な態度を示していたが、それは「尾大の弊」を心配する立場からであった。[18] それは長州藩の諸隊勢力と長州藩討幕派指導部との矛盾の反映であった。すなわち討幕戦争の開始が、公議政体論的国家構想では、もはや従来からの階級支配を維持できないほどの矛盾の激化をもたらすであろうことを、諸隊の動向のなかに、木戸や伊藤は見出していたのである。したがって中岡が、「諸隊ノ勢」を評価していたからこそ、武力討幕の立場を堅持し得たと判断するのである。

ところがこのことは、討幕派の国家構想を公議政体論的国家構想と単純に同一視することを許さないであろう。たしかにこの時期の討幕派が、公議政体論以上の国家構想をもっていた証拠はまったくない。だが討幕戦争の開始がもたらす矛盾の激化は、単一不可分の中央集権的国家権力である明治政権を実現しなければ抑制できないであろう。だからこそ、戦争開始の直前になって木戸は「諸隊の勢」が藩体制の枠をこえる危険を感じて「現世の憶病」となったのである。だから逆に、中岡が討幕挙兵の準備過程で組織した陸援隊の構成が、土佐出身にとどまらずきわめて広い範囲から参加していることは、武力討幕路線が、藩体制の枠を温存する公議政体論をのりこえざるを得ないことを示して

いるであろう。

以上、７月22日付の中岡慎太郎の手紙が書かれた前提を説明しながら、武力討幕路線が大政奉還路線と共通する部分をかなり持ちながら、結果的にはちがった方向をもたらすものであることを論じてきた。もちろんこのことを完全にあきらかにするためには、もっと多くの状況をあきらかにし、論点を整理していかなければならないであろうが、この点については後考を待ちたい。

注

(1) 『保古飛呂比(二)』Ｐ418。

(2) 拙稿「土佐藩における討幕運動の展開」（史林40―5）

(3) 『大久保利通文書(一)』Ｐ479。

(4) 同　上　Ｐ475。

(5) 平尾道雄『中岡慎太郎』Ｐ353。

(6) 『谷干城遺稿(一)』Ｐ42。

(7) 平尾前掲書Ｐ353。

(8) 同　上　Ｐ354。

(9) 井上清『西郷隆盛(上)』Ｐ208。

(10)・(11) 『保古飛呂比(二)』Ｐ391。

(12) 同　上　Ｐ391。

(13) 同　上　Ｐ396。

(14) 同　上　Ｐ398。

(15) 同　上　Ｐ403。

(16) 同　上　Ｐ396。

(17) 同　上　Ｐ401。

(18) 拙稿「幕府の倒壊と戊辰戦争」（岩波講座日本歴史14）Ｐ284。